

令和元年6月21日現在

機関番号：32617

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02421

研究課題名(和文)パリ亡命ロシア文壇の言説空間に関する研究：「亡命文学」概念の生成現場として

研究課題名(英文)The dynamics of Russian emigre literature in Paris: Through discussions on the concept of Literature in Exile

研究代表者

三好 俊介(MIYOSHI, Shunsuke)

駒澤大学・総合教育研究部・准教授

研究者番号：00311853

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：ロシア革命以後の長きにわたり、言論の自由の制約される故郷を逃れた亡命ロシア人が集住するパリは、ロシア文化継承の重要な拠点となった。本研究では、亡命ロシア文壇(特にパリ)における重要人物である詩人かつ文芸評論家V・ホダセヴィチに着目し、欧米各国に散在する関連資料(一次史料多数を含む)を実地踏査により収集した。これにより亡命ロシア文学界の実像のさらなる解明が期待される。大量の収集資料の分析結果はすでに一部を発表しているが、さらなる分析も鋭意進めている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

亡命ロシア文学研究の困難の一つは、研究資料がロシアだけでなく世界各地に散在するために当時の実像がつかみにくい点にある。本研究ではこの困難を克服するため、ロシア(モスクワ、サンクトペテルブルク)、米国(コロンビア大学、イエール大学)、フランス(パリ)の図書館等を訪問し、ホダセヴィチ周辺に焦点を絞った集中的な資料収集を行った。さらに、収集対象外の関係資料のアクセス手法など、今後の研究にむけた知見も獲得できた。得られた知見の分析・発表を順次おこなっており、亡命ロシア文学の重要な諸問題(創作の環境や、作家間の交流、文学論争など)について一層の解明が期待できる状況となっている。

研究成果の概要(英文)：After the Russian Revolution, Paris was the cultural center of Russian emigres for a long time. This project aims to research materials about V. Khodasevich, an outstanding poet and literary critic of Russian literature in exile (especially in Paris). I visited libraries and archives in Japan, Russia, America and France, and found many important materials, including Khodasevich's letters and manuscripts. Using these materials, I am publishing my analyses about the life in exile of Khodasevich and other Russian emigre writers.

研究分野：ロシア文学

キーワード：ロシア文学 亡命文学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1)本研究の研究代表者は、亡命ロシア詩人ヴラジスラフ・ホダセヴィチ (Vladislav Khodasevich 1886 - 1939) の詩作について長期にわたり研究を積み重ねるなかで、この詩人が中心的役割を果たしたパリ亡命ロシア文壇全体の力学に関心をいだき、本研究を着想した。ホダセヴィチはポーランド・ユダヤ系移民の子として帝政ロシアのモスクワに生まれ、当初はロシア象徴派の詩人として、後には革命下ロシアを觀照する独自の哲学的詩風の開拓者として、ロシア詩史に大きな足跡を残した。ボリシェビキ政権の迫害が強まるなか 1922 年に出国したのちはベルリンを経てパリに渡り、没するまでの 15 年間、パリに留まり亡命生活を送った。パリでは徐々に詩作から退くが、文芸評論や評伝、回想記を中心にロシア語を用いて終生にわたり旺盛な執筆活動を行い、当地を代表するロシア語新聞『ルネサンス』や『最新ニュース』の文芸主幹や常連執筆者として、大量の文芸評論や社会評論を残している。

(2)ホダセヴィチの例も示すように、ロシア革命ののち内戦の戦火や言論弾圧によって故国を追われたロシア人らの多くは当初ベルリンに逃れるものの、大戦間期ドイツの経済混乱によるベルリンのロシア人コロニーの衰退を受け、パリが両大戦間期におけるロシア人の中心的亡命地となったのである。当時のパリでは、ロシア語新聞や書籍などの出版活動も活発に行われ、言論統制の強まるソ連本国とは対照的に自由闊達なロシア文学や批評活動が花開いた。パリのロシア文壇は、20 世紀ロシア文学を構成するきわめて重要な要素である。上述のようにホダセヴィチは長くパリの主要ロシア語新聞で文芸評論家として活躍し、当地のロシア語文壇全体を一望する立場にあった。そこで研究代表者は、この人物の活動や言説をひとつの突破口に、複雑なパリ・ロシア語文壇の力学を分析できないかと考えたのである。

(3)パリ時代のホダセヴィチについて先行研究は必ずしも充実していない。それは、彼が亡命詩人であるにくわえ下記の特長事情から、関係資料が各国に分散し、容易なアクセスを許さないからである。

(4)ホダセヴィチ本人が所蔵していた書簡などの文書は、ロシア・米国の複数の施設に散在している。これは、事実上の妻だったニーナ・ベルベロワが、ユダヤ系であるホダセヴィチの没後に旧宅に残された書類を、パリを占領したナチスによる破棄から守り、米国内の複数の大学などに分散して寄贈したからである。そこで本研究計画では、これらの史料の集中的な発掘作業により研究上の困難を克服し、未解明の点が多い亡命ロシア文化研究に新たな知見を加えることを目指したのである。

2. 研究の目的

(1)ロシア革命後の初期亡命ロシア文学 (いわゆる「亡命ロシア文学の第一波」) の中心として機能した両大戦間期パリのロシア語文壇に関し、そこで交わされた「亡命ロシア文学の針路」をめぐる対話と論争を、文壇の重鎮だったホダセヴィチに関する史料 (主として彼の遺したメモや書簡類) によって解明するのが、研究の目的である。本研究はいわば、一人の「時代の証言者」の視点から、異郷のロシア人による亡命文学論を整理・記述する試みといえる。解明を目指した具体的な論点は、つぎの(2)以下に掲げる三つである。

(2)「ホダセヴィチと小説家ナボコフの協働」 : 亡命ロシア文壇を代表するこの二人の間に緊密な盟友関係が存在したのはよく知られるが、他方、両者の文学観の微妙な差異については、これまで十分に解明されていない。たとえば、両者は共にロシア文学の古典的伝統を重視したが、実は彼らの「ロシア的伝統」についての考え方は同じではない。両者の言説を比較対照し、亡命文学の針路をめぐる様々な見解について検討する。

(3)「ホダセヴィチ / アダムヴィチ論争」 : これは、亡命環境下の心情吐露に重点をおくロシア詩人アダムヴィチらいわゆる「パリ調」詩派と、普遍的な文学技量を重視するホダセヴィチの間で、亡命ロシア文学の意義と運命をめぐる展開された文学論争である。1920 年代半ばのパリの活字媒体で勃発したこの論争は、十年ほどの継続期間において、他国も含めた亡命ロシア文学界全体に影響する大論争に発展したのだが、この論争の細部を史料にもとづき検討する。

(4)「史料にみる異郷社会への眼差し」 : ホダセヴィチと関わりの深い亡命ロシア作家 (先述のニーナ・ベルベロワや、パリ時代初期にロシア語新聞『日々』に共同で携ったアルダーノフら) の書簡等もふくめて資料を検討し、彼らが西欧文化をいかに受容し、異文化の中に自己を定位したのかを考える。

3. 研究の方法

(1)日本、ロシア、米国およびフランスの文書館等での資料収集が、研究活動の中心を占めている。すなわち、平成 27 年度に北海道大学付属図書館および同大学スラブ・ユーラシア研究セ

ンター（札幌市）平成 28 年度にロシア国立図書館（National Library of Russia サンクトペテルブルク市）平成 29 年度にロシア国立図書館（Russian State Library モスクワ市）コロンビア大学付属図書館内の文書館「ロシア東欧文化バフメチェフ・アーカイブ」(Bakhmeteff Archive of Russian and East European Culture ニューヨーク市)およびフランス国立図書館（BnF パリ市）平成 30 年度にイエール大学付属バイネキ手稿稀覯書図書館（Beinecke Rare Book and Manuscript Library 米国コネティカット州ニューヘイヴン市）に出張し、所蔵資料の収集を行った。

(2)このうちロシア（モスクワ、ペテルブルクとも）では、近年にロシア各地で書かれた、清新な視点による学位論文を、集中的に探索した。

(3)また、米国での資料収集はいずれも、ホダセヴィチやその関係者の手稿や書簡など、一次史料の収集に特化するものとなった。特に、コロンビア大学バフメチェフ・アーカイブ所蔵の有名な亡命ロシア文化関連文書群である「カルボヴィチ文書」、さらにイエール大学バイネキ図書館では大量のホダセヴィチ自筆原稿類を集中的に調査した。

(4)このほか、海外出張先の市中書店および日本国内において、関係資料（新刊書、古書、学位論文）を補完的に購入した。

4．研究成果

(1)文書館等での資料収集はほぼ当初計画どおりに遂行し、質・量ともに予想を上回る内容の文書類（草稿、メモ、書簡、写真のほか、ホダセヴィチの外国人登録証など行政文書）を撮影・複写・閲覧することができた。ホダセヴィチだけでなく、ベルペロワ、アルダーノフら周辺人物をめぐる一次史料も、ほぼ当初の計画どおりに収集することができた。各国に散在する関連資料のかなりの部分を今回の研究活動で収集し、一元的・総合的な分析を行う態勢を整えるにいたった。

(2)このうち、ロシア出張ではモスクワの国立図書館において、「ホダセヴィチ/アダモヴィチ論争」に関し、新たに注目すべき研究がロシア国内で行われていることを確認した。

(3)米国コロンビア、イエール両大学図書館の収蔵文書の充実ぶりは予想をはるかに上回るものであり、学外からの来訪者に対して収蔵文書を広く公開する態勢にも、瞠目すべきものがあった。両文書館関係者に適切なサポートを賜ったこともあり、最大限の効率で収集を遂行することができた。厚く御礼申し上げたい。

(4)また、パリ出張の際には文書館での資料収集の傍ら、実地踏査として、市内や近郊に散在するホダセヴィチの旧居、あるいは亡命ロシア人が多く住んだ街区（ロシア正教会や墓地もふくむ）に足を運んだ結果、かつての亡命ロシア人社会の雰囲気を実感としても把握することができたように思う。実地踏査の際には、いずれ学会や著書などでの成果発表の場において紹介できるよう、多くの写真を撮影し、その一部はすでに公開研究会（下記「ワークショップ」）で使用している。

(5)収集した大量の資料の分析も進めており、分析結果を生かした論文をすでにくつか公表した。研究期間内に公表した論文は、研究の総括というよりはむしろ最終的な研究目的に向けた一里塚というべき位置づけであり、亡命前を含むホダセヴィチの基本的文学観や作風について、今回の収集資料によって得られた新視点から論じたものである。研究の最終目的（亡命文壇における様々な亡命文学論の解明）についての分析も鋭意進めており、まとまりだしい順次、結果を公表する。単なるエピソードの羅列におちいることなく、いずれ一冊の体系的著書として集成できるよう、統一感のある分析をめざし作業中である。とくに、「ホダセヴィチ/アダモヴィチ論争」や「ベルペロワ関連文書」については、新知見をもたらすような資料が得られたため、分析と発表を急ぐこととしたい。

(6)このほか口頭発表として、研究期間内に二つの公的研究会で、研究内容に関連する発表を行った。このうち特に、平成 31 年 2 月に開催した研究会「科研費公開ワークショップ：革命前後のロシア文学」は、本研究をとおして得られた史料探索スキル（アクセス方法や所蔵状況など）をわが国の研究者と広く共有することを目的に、研究代表者（三好）が自ら企画・実施したものである（当日は、次世代を担う若手研究者らに会場をいただき、成功裏に意見交換と情報共有を行うことができた）。研究期間終了後もひきつづき、本研究で得られた知見について口頭発表をおこなってゆく予定である。

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

三好 俊介、詩人の誕生：若きホダセヴィチと初期詩篇、駒澤大学外国語論集、査読無、

26号、2019、115 - 145

<http://repo.komazawa-u.ac.jp/opac/repository/all/38510/rgs026-06-miyoshi.pdf>

三好 俊介、大戦と革命の試練の下で：V・F・ホダセヴィチ盛期モスクワ詩篇をめぐって、駒澤大学外国語論集、査読無、21号、2016、221 - 248

<http://repo.komazawa-u.ac.jp/opac/repository/all/36018/rgs021-10-miyoshi.pdf>

[学会発表](計2件)

三好 俊介、ホダセヴィチの国外アーカイブ、科研費公開ワークショップ：革命前後のロシア文学、於駒澤大学駒沢キャンパス、2019年2月

三好 俊介、亡命期ホダセヴィチ詩篇を読む：「ソレントの写真」、科研費基盤C(研究代表者：諫早勇一名古屋外国語大学教授)「ルースキイ・ミール：文化共生のダイナミクス」2016年度第2回研究会「戦間期ヨーロッパのロシア世界(ルースキイ・ミール)」、於駒澤大学大学会館246、2017年2月

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。